

ギュスターヴ・クールベ

「画家のアトリエ」

（キャンバス・油彩 縦359センチ 横598センチ）
 一八五五年 パリ・オルセー美術館

「わがアトリエの精神的・物理的歴史」と自筆解説にある。パリ万国博覧会出展を目論んだ作品だが、政府の意向に盾突く画家の傲慢な挙動ゆえか、出品を拒絶され、会場ほど近くのモンテーニュ街の私設仮小屋で公開された。独立不羈のクールベ、時に三十五歳。副題には「現実的寓意」なる不思議な文句が添えられている。ホメーロスが詩を、アリストテレスが哲学を寓意するというなら話も分かる。だが画面右手に見えるポードレールは当時まだ駆け出し詩人、ブルードンは出獄するや著作が発禁処分の社会主義者。寓意というには余りに「現実的」な友人たちだ。

画面右手の支持者に対して、左に描かれたのは密猟者に扮した仇敵、皇帝ナポレオン三世と、財務大臣フルドや司祭服姿の御用評論家ヴィヨラの取り巻き連だ、との説もある。そして中央には、周囲の闇を光明へと変貌させる魔術のごとく、故郷オルナンの風景が、画家自身の筆により生命を与えられて輝く。

芸術による世界の救済。いささか誇大妄想的な希望をオルナンの巨匠が託したと目されるこの大作は、規定の「死後十年」を待たずに八一年にはルーヴル入りの栄に浴す。だが百五年の後『アトリエ』は『オルナンの埋葬』とともに、セーヌ対岸に落成したオルセー美術館に移送された。大絵画の伝統の最後を飾る作品から、近代の幕開けを告げる作品へ。その歴史的意義も大きな変更を迫られた。

（稲賀繁美 三重大学人文学部助教授）